

「男、突っ走る！」

第30回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

入井松西有稲佐尾	門	藤五鬼宮	水渡杉滝杉松中高山田志濱	木木木	木
沢深野澤賀森藤形	野	野川頭田	澤部島山井岡階辺崎田口	内内内	内
武隆	賢	真孝美春	光恭由優壯康一良悠寧	健真孝	雅
茜彦進雄勇亨篤代	哉	弓之彩奈	太崇平恵菜武吾行磨樹喜々	次郎保志	也
(32)	(18)	(18)	(18)	(14)	(18)
(40)		(18)	(18)	(45)	
(58)		(18)	(18)	(47)	
(44)		(18)	(18)		
(49)		(18)	(18)		
(59)		(18)	(18)		
(60)		(18)	(18)		
(54)		(18)	(18)		
中央高校3年2組副担任	中央高校元生徒	中央高校3年6組生徒	中央高校3年2組生徒	雅也の弟	中央高校3年2組生徒
中央高校2年2組副担任		中央高校3年6組生徒	中央高校3年2組生徒	雅也の母	
中央高校1年1組担任		中央高校3年6組生徒	中央高校3年2組生徒	雅也の父	
中央高校生徒指導主任		中央高校3年5組生徒	中央高校3年2組生徒		
中央高校3年学年主任		中央高校3年6組生徒	中央高校3年2組生徒		
中央高校総務主任		中央高校3年6組生徒	中央高校3年2組生徒		

1 中央高校・校門前

『卒業証書授与式』の看板が立てられている。

2 同・3年2組教室

雅也たちが、色紙にそれぞれ寄せ書きをしている——武がやってくると、色紙を渡す。

武「はい。書いていたよ」

雅也「サンキュー。(と色紙をもらうと)おい、『ノートありがとう。おかげで卒業できます』って、もつと他に書くことあるだろ。松井以外にも、ノートのこと書いてる子いるけど、俺との三年間はノートしかないのかよ」

武「その中でも、俺が一番木内に世話になっただって思ってるぞ」

雅也「そりゃね、英語のノートを見せてくれたの、明日の時間割を教えてだの、松井がこれから海上自衛隊に入れるのは、俺のお

かげだと思っよ

武「それが、この色紙のコメント通りだよ」

雅也「なるほどねえ」

と、一磨、良樹、康行がやってくる、

一磨「木内、書いてッ」

良樹「頼むわ」

康行「よろしく！」

雅也「はいよッ」

と、筆ペンを取り出し、それぞれの色紙にコメントを書き始める。

康行「何だか、あつという間の三年間だった

よね」

一磨「うん。中学校より早く感じた」

良樹「何だろうな、この違い」

雅也「不思議だよな。康行とは高校の三年間

でしか一緒にやなかったけど、本当に短く

感じたし、ましてや良樹とかつちゃんは中

一から知ってるでしょ。丸六年も経ったよ

うには思えないんだよな」

一磨「卒業してからも、定期的に会おうね」

康行「もちろん」

雅也「成人迎えたら、みんなでお酒飲みたいね」

康行「分かる」

良樹「木内弱そうだよな」

雅也「多分ね。良樹なんて、絶対強いでしょ」

良樹「どうかかなぁ」

雅也「まあ何かあったら、あのグループLI

NE使って連絡取り合おうよ。康行は地元

の会社に就職だし、良樹とかつちゃんは名

古屋の大学で、俺は専門学校。みんな地元

に残ってるんだもの、いつでも集まろうね」

一同、大きく頷く——寧々が雅也のと

ころへやってくる、

寧々「ママ。六組の五十川君と美彩が来てる

よ」

雅也「分かった。すぐ行く」

3 同・廊下

雅也、孝之、美彩が話している。

孝之「木内君。三年間、お世話になりました」

雅也「どうしたの急に、改まって」

美彩「卒業式終わってからだど、会うタイミングないかもしれないから、先に挨拶しておきたいって、こいつが言うから」

雅也「別に一生会えるわけじゃないんだもの。

あ、でもあれか…五十川君、大学受験合格したら、そのまま大阪に引っ越しちゃうんだもんね」

孝之「だからこそ、挨拶しておきたくて」

雅也「こっちだって、五十川君にはコンピュ―タ部でどれだけお世話になったことか。

美彩だって、パンテーンってニックネームつけてくれて、検定勉強やら生徒会のゴミ拾いやら、本当に楽しかった思い出ばっかだよ」

美彩「パンテーンは、これまでの私の男友達にはいないタイプだったから本当に楽しかった。また春奈も入れて四人で集まろうよ。グループLINEで連絡取り合ってさ」

雅也「そうだよ。まあ、どうせならちゃん
と四人揃いたいから、五十川君が大学の連
休でこっちに帰ってくるときに集まるか、
俺たちが五十川君に会いに行くために大阪
に行くっていうのも良いかもしれないね」
孝之「ぜひ来てください。大阪案内しますか
ら」

雅也「うん。それを楽しみにしてる」

と、袴姿の安代が通りかかると、

安代「そろそろ入場の準備ですよ。教室に入
ってくださいね」

美彩「もうそんな時間なんだ」

雅也「卒業式終わって、いろいろ済んだらそ
っちの教室行くから」

美彩「うん」

孝之「じゃあ」

と、去っていく孝之と美彩——雅也、
見送ると、教室に入っていく。

保護者たちの車が次々に入ってくる――
 その誘導をしている有賀。

有賀「奥から詰めて停めてください」

と、一台の軽自動車が駐車をする。その車から、正装の真保が下りてくる。

5

同・体育館

厳かな雰囲気の中で、卒業式が行われている――卒業生が『仰げば尊し』を歌っている。

×

×

×

司会進行の稲森が、マイクの前に来ると、

稲森「卒業生、退場」

BGMが流れ、佐藤が先頭に立って赤絨毯の上を歩いていく――後ろにそれぞれ
 の担任と生徒が退場していく。一組と六組が同時に退場する――その中にいる孝之、美彩、真弓。その後、安代とスーツ姿の入沢が二組の真ん中に

来る。安代の合図で、二組の生徒が起立する。安代と入沢、五組の担任と副担任を先頭に、雅也たち二組の生徒と五組の生徒が同時に退場する。雅也、泣きながら退場していく。雅也の隣で一緒に退場している春奈。

春奈 「え、泣いてるの？」

雅也 「別に泣いてないし」

春奈 「よく言うよ」

と、順番に退場していく生徒たち。

6 同・廊下

雅也たち二組の生徒が歩いている――泣き続けている雅也。と、崇と光太が来て、

崇 「おいおい、何泣いてるんだよ」

光太 「無事に高校とおさらばできるんだぞ」

雅也 「（泣きながら）……」

7 同・3年2組教室

雅也たちが入ってくる——既に入って待っている安代と入沢。

雅也「安代先生……」

と、泣きながら安代に抱き着く雅也。

その様子を見て、苦笑しながらも見届けるように見つめている悠喜、壮吾、恭平、良樹、一磨、康行、武、崇、光太、寧々、由紀恵、優菜というクラス的面々。

× × ×

一同が座っており、安代が前で話している。

安代「皆さんとの出会いは、一年生の時でした。まだ中学校を卒業して間もない頃で、高校の門をくぐる皆さんの初々しい姿は、今でもはっきり覚えています。一年生当時、二組は男子三十人、女子七人というアンバランスなクラスでしたが、こうしたクラスの担任は、長年の教師生活でも経験がなく、私自身、学年主任の佐藤先生から二組の担

任をお願いしたいというご連絡をいただいたときは、正直戸惑いました。それでも皆さんは、自分らしくちゃんと行動に責任を持った立派な人に成長してくれました。そして一年空いて、昨年の四月に再び皆さんの担任となったとき、一年生とはまるで別人のように最高学年としてたくましくなった皆さんの姿を見たときは本当に嬉しかったです。前年の西澤先生のご指導のおかげだと思っています。なので最後の一年間は、私も正直平和に過ごせたと思っています。学校祭では、唯一二組は二年連続優勝経験のクラスとなりましたが、それもやはり一年生から少しずつ築き上げてきた、この二組の絆の賜物だと思っています。こんな素敵なクラスの担任を二回も経験させていたでいて、本当に良かったと思っています。皆さんこれまで、本当にありがとうございます。ありがとうございました」

と、一同拍手をする――雅也以外にも

何人か泣いている生徒がいる他、入沢もハンカチで目を押さえている。

× × ×

机を片付けて、黒板の前のスペースに生徒たちが集合している。カメラの準備をしている佐藤。

一列目の真ん中にしゃがんでいる安代と入沢。そのすぐ隣に雅也、それを囲むように良樹、康行、一磨らが並ぶ。入沢の隣には、寧々、由紀恵、優菜たち女子生徒が並ぶ。

雅也 「安代先生の隣なんて、贅沢ですね」

安代 「そう言ってもらえるだけで嬉しいわ」

優菜 「私、茜ちゃんの隣」

由紀恵 「じゃあ、私茜ちゃんの後ろ」

寧々 「早く並びなよ」

茜 「私の隣は、限定一人よ」

佐藤、カメラを構えながら、

佐藤 「はい全体的にもう少し中央に寄って。

(とカメラを覗き) そうそう。はい、じゃ

あ撮りますよ。はい、チーズ。（とボタンを押す）」

二組の顔ぶれが、一枚の写真に収まる。

8 同・職員室

デジカメを持った雅也が入ってくる。

雅也「失礼します。（と西澤を見つけると）」

西澤先生」

西澤「おお、木内か。卒業おめでとう。お前たちの学年は、俺がここに来て最初のクラスだったからな。いざ卒業すると、寂しいな」

雅也「一年間でしたけど、本当にお世話になりました」

西澤「専門学校行くんだって？　しっかり学んで、売れっ子作家になってくれよ」

雅也「はい。あ、それで最後なんで記念写真撮ってほしくて」

西澤「お、良いぞ」

雅也、近くの教師を見つけると、

雅也「すみません。カメラのボタン押しでも
らつてもよろしいですか？（とカメラを渡
す）」

西澤「よし、肩組むか」

雅也と西澤、肩を組み合った状態でカ
メラに映る。

雅也「ありがとうございます」

西澤「こちらこそ」

と、強い握手を交わす。

9 同・生徒会室

雅也が入ってくる——真弓が既に来て
おり、井深と話している。

雅也「何だ、真弓さんも来てたんだ」

真弓「うん。生徒会の後輩たちが、アルバム
作ってくれたんだって」

雅也「アルバム？」

と、井深がアルバムを雅也に手渡す。

井深「生徒会活動の写真を厳選して、生徒会
の子たちがアルバム作ってくれたんだ」

雅也「ありがとうございます」

と、アルバムを開く——体育祭の障害物リレーの様子、会議の様子など、生徒会での雅也の写真がたくさん収められている。

雅也「半年間という短い間でしたけど、本当に楽しい経験をさせてもらいました」

井深「こちらこそ、あの障害物リレーは木内だったからこそ盛り上がったと思うぞ」

雅也「そうだと良いんですけど」

真弓「あ、そういうば……（と鞆から卒業文集を取り出すと）ねえ、このポエムってツリーインが書いた？ この『生きること』っていうやつ」

雅也「どうして？」

真弓「だってペンネームがさ、『万年筆の雅』って書いてあるんだよ。明らかに、ツリーインでしょ」

雅也「バレたかあ」

真弓「ペンネームのつもりかもしれないけど、

こんなのすぐ木内雅也って言ってるような
もんだよ」

雅也「そう？」

真弓「そうだよ。でも、こうやって何かの文章を見ただけで、ツリーインだって分かるような作品、これからも書いてね」

雅也「いつか、有名な作家になれるように頑張る」

井深「今のうちに、サインもらっとこうかな」

雅也「（笑いながら）よしてくださいよ、そんないつになるか分からないんですから」

真弓「私、応援してるから。それに、いつかツリーインの作品にも出てみたいし。約束だよ」

雅也「うん」

大きく笑顔で頷く雅也。

10 同・廊下

雅也が歩いていると、松野とすれ違う。

雅也「松野先生」

松野「木内。この度は、卒業おめでとう」

雅也「ありがとうございます」

松野「ITパスポートの合格、本当におめでとう。試験勉強を頑張ってた話は、入沢先生から伺ってた。小学生へのパソコン授業も、ちゃんとスーパーバイザーやってくれたみたいじゃないか。本当に、この情報活用コースの鑑のような生徒だったよ」

雅也「とんでもない。僕には、情報しか取り柄がなかったんですよ。運動もできないし、音楽的な才能もないし、理数系は苦手だったし……その中で、一番自分らしさが出せたのが、情報だったんです。プログラミン
グ検定一級取れなかったのは残念でしたけど、それよりも国家資格であるITパスポートに合格できたことで、僕は十分だと思
ってます」

松野「これから専門学校行ったり、社会に出たらもっと難しい試験を受けることだってあるかもしれないけど、木内なら大丈夫だ」

雅也「（苦笑して）そうだと良いんですけどね」

松野「またいつでも、学校遊びに来てくれよ」

雅也「（笑顔で）はい」

11 同・校門前

自転車に乗っている雅也が出てくる――ふと自転車を止めると、振り向いて、校舎を名残惜しそうにいつまでも眺めている。

12 木内家・居間（夜）

真保、孝志、健次郎が夕飯を食べている。

真保「今頃、みんなで楽しくわいわいしてるかしら」

孝志「卒業式の後だもんな。楽しくやってるんだろ」

健次郎「お兄ちゃんも、これで高校卒業かあ」

真保「あの子なりに、三年間頑張ったと思う」

わ」

孝志「そうだな。検定受けたり、役職受けたり……大変だったかもしれないけど、あいつなりに充実した学校生活が遅れたんだつたら、それで良いんじゃないか？」

真保「（微笑んで）そうね」

13 回転寿司店

雅也、賢哉、悠喜、壮吾が集まっている。

賢哉「どうする、先に食つとくか？」

悠喜「そうだな」

壮吾「スギちゃん、どうしちゃったんだろうな」

雅也「遅いね、何かあったのかな」

と、恭平が入ってくる。

恭平「悪い、遅くなった」

一同、恭平の姿を見て啞然とする——茶髪になり、耳にはピアスをつけている。

雅也「え……スギちゃん、卒業式終わってから、この数時間で何があったの？」

恭平「これでようやく髪染められると思ってさ、すぐ美容院行ってきた」

賢哉「行動力すげえな」

雅也「春休みに、いきなりモヒカン頭にした奴が何言うか」

賢哉「おいおい、また懐かしいネタ引っ張ってくるな」

壮吾「何だか卒業したって実感わかないよなあ」

賢哉「俺は、あと一年あるからな」

雅也「通信制高校をちゃんと卒業できたら、その時はまたみんなで集まってお祝いしようよ」

悠喜「お、良いね」

壮吾「これから、進学したり就職したり、みんなバラバラになっちゃうけど、そこでも新しい友達見つけて、それぞれ充実した生活送ってこう。それで、たまにはメンバー

で集まろうよ」

雅也「そうだよね。俺、小学校から高校までずっと地元だったでしょ。だから、これから専門学校で名古屋まで行って、誰一人知らない環境の中で、学校生活送れるのか、ちよつと不安なんだよね」

恭平「でもあれだろ。専門学校なら、うちの嫌いな体育の授業もないだろ？」

雅也「そうなの。この間、教材と時間割表が郵送されてきて確認したんだけど、物の見事に文章を専門にする授業ばかり」

賢哉「お前にとっては、楽しそうな授業だな」

雅也「うん。だから俺は、俺なりに専門学校生活楽しもうと思う」

悠喜「それが良いよ。木内が何事にも楽しんで向き合ってたなら、自然と周りだってそういう雰囲気になるんだから」

雅也「たまには良いこと言うじゃん」

悠喜「うるせえよ」

笑い合う一同。

賢哉「さて、食うか」

悠喜「だな」

壮吾「うん」

雅也「よし、食べよう」

と、レーンから回ってくる寿司を取っ

ていく——談笑しながら、仲良く食事

を囲む雅也たち。

N「高校の三年間は、僕の中であつという間

に過ぎてしまった時間でした。楽しいこと、

嬉しいこと、悲しいこと、大変なこと……

とにかく盛沢山の中で過ごした高校生活は、

僕にとっては充実したものでした。しかし

やはり、それと同時にクラスメイトとの別

れは辛いものです。しばらく会えなくなる

けれど、またみんなで会える時に会おうと

思いながら、僕たちは高校生活最後の食事

会をいつまでも楽しんでいったのでした」

つづく